

明專寺縁起

抑俗姓桓武天皇の末孫國香六代の後胤若狹守經俊の第五子經時出家して三河國賀茂郡月原村一字を起立し明專院と號し南岳天台の宗風を學ぶと雖も自力の妄雲は覆はれて心情悟り難く眞の知識は遇奉らんことを願ふ爰に

祖師聖人六十歳よりて花城の道は趣き給ひ同國矢矧宿柳の道場は於て他力本願の旨趣を勸化し給ふ其時宿縁の催しと急ぎ柳堂は詣て聖人へ謁老奉り弘願念佛の一法を聽聞し奉り身の毛もよたれ速は自力の情を翻し偏に他力の願海は乘り本宗を捨て御弟子となせり其時聖人泥筆九字の御名號を授與し給ひ法名永田と云云其後天正年中顯如上人太坂御籠城の時三州より宇井、鈴木、寺島、近藤、深美、小野、鶴美、中村、石川、原田、黒柳、永井、清水、本多、坂口、杉浦、松平、山下、高橋等の門徒を引具し御味方申し奉り然る後宗門停止の事あり此故に師檀とも彼國あるべしとて安置の實物土中へ埋め置き只太子御自作の南无佛の木像本尊九字の御名號并御自作の御眞影十字の名號蓮師御眞筆の六字名號其外善知識の尊筆を供奉し同國網平といふ所まで落行し俄か太子の尊像重く上り給ひ依て山中に埋め奉り聖人の旧跡を慕ひ越後國を志し國分の邊り習禪寺村は暫く居住す先は置奉る太子の尊像は土中へ埋め年月を経給ふうち野火度々及ぶと雖も太子のおります所のみ焼残りて青艸繁茂せり故に村老奇異の思ひを為し其所を掘りふかちて見れば南无佛の尊像あり依て是を旧地へ移し奉る又門徒の内了西禪門は打首ふ定ると雖も改宗の心あく往生を佛陀に任せ參らせの上は何か命のおりかめと思ひきりて引出され念佛して居る所を太刀取後へ回り首を打と三度及ぶと雖も安然として元の如し檢使太刀取不思議と思ひ懷中を捜せば十字の名號歸命の二字血は染みて飛び給ふ見聞の諸人舌を震ひ恐れおのき敬信せずといふことあり此故に赦免を蒙り當今柏原の駅に住まると然り右縁起如件

但參河より現在地までの沿革左の如し

貞應二癸未年正月三河國賀茂郡月原村に創立す其後天正五丁丑年越後國習禪寺村に移轉門徒信濃國水内郡高井兩郡あり同十二年三月信濃國水内郡中宿村に移轉慶長九年四月同國同郡普光寺村に移轉一猶寛永二乙丑年三月柏原村東浦へ移轉一延寶元丑年六月現在地へ移轉

長野縣上水内郡柏原村(是は抄畧モノニ詳細は本縁起記載)

終北山

明專寺

妙好人一茶

明専寺住職 月原秀爾

今日はご遠方から当寺にお参りくださりまして有り難うございます。

俳人一茶の菩提寺ということで、お訪ねくださったことと存じますので、一茶について少しお話をさせていただきます。

予めお断りしておきますが、話のなかに所謂「差別語」が出で参りますが、これは一茶の作品と信心の優れていたことを、そして彼が決して人を差別しなかったことを、お伝えるためでありますから、誤解のないようにお願いいたします。

結論を申しますと、一茶は浄土真宗の篤信の信者即ち妙好人であった、ということです。

○穢多町も夜はうつくしき砧哉（文化句帖 文化1・42才）

○えた寺の桜まじまじ咲きにけり（七番日記 文化7・48才）

これらの句は、一読して直ぐに分かるように、決して差別の心をもたず、温かい連帯感を持って被差別地区が美しいと、堂々と咲いていると詠み切っています。

こうした被差別地区や、虐げられた人々を詠んだ句が沢山ありますが、どれ一つとして差別の心を持って詠んだものはありません。徳川幕府が身分制度による差別支配を押し進め、差別する事が当たり前前の時代にあって、一茶がいかに優れた人権感覚の持ち主であったかが分かります。

『人は生まれにより尊いのではなく、また生まれにより賤しいのでもない。

人はその行いにより尊く、またその行いにより賤しいのである。』

というお釈迦様のお言葉。また、

『四海の内皆兄弟なり。御同朋御同行とこそかしづきて候。』という親鸞聖人のお言葉にあるように、仏教の基本は絶対の平等観です。

一茶の心底には、3才で母に死別し、全戸が浄土真宗の柏原と言う環境のなかで、14才まで祖母に養育された幼少時代に培われた真の信心があったからこそ、こうした句が詠めたのではないのでしょうか。

○花の陰あかの他人はなかりけり（八番日記 文政2・57才）

この句にしても、人はみんな大いなる一つの命の源に繋がっている同朋である。大いなる命の世界から個々のいのちを頂いてこの世に生を受けて、お互いが支えあって、生かされ

て生きている存在が人間である。という仏教の根本真理を深く弁えていたからこそその句でありましょう。

『から風の吹けばとぶ屑家は、くづ家のあるべきように、門松立てず煤はかず、雪の山路（やまじ）の曲り形（な）りに、ことしの春もあなたまかせになんむかへける

○目出度さもちう位也おらが春

○ともかくもあなた任せのとしの暮（おらが春 文政2・57才）』

また、「父の終焉日記」に医師に匙を投げられた時にも、このように記しています。

『医師（くすし）にかく見はなさる上は、秘法仏力を借り、諸天庇護のあはれみを乞うと思へども宗法なりとてゆるさず。只手を空うして、最期を待つより外はなかりけり。』

これらは、一茶の浄土真宗の門徒としての面目躍如たるものがあります。

長野県歌「信濃の国」にも歌われている江戸中期の儒学者・太宰春台はこういいます。

『浄土真宗の門徒は日の吉凶、方角の善し悪しを言わず、現世を祈らず、門松立てず、物忌みせず。これひとえに親鸞氏の功績なり。』

当時の浄土真宗の門徒は、みんな一茶が記しているような生活態度を保っていたのです。

○春立つや愚の上に又愚にかへる（文政句帖 文政6・正月61才）

親鸞聖人の師法然上人の「和語灯録」に『浄土宗のひとは愚にかへりて往生す。』とあることと符合しています。

最晩年に読んだ、

○花の陰寝まじ未来が恐ろしき（文政九・十年句帖 文政10年6月）

の句も、ただ死にたくないと言っているのではなく、「嘆異抄」の著者に擬せられる唯円が師の親鸞聖人に『念仏を唱えても勇躍歓喜の心が湧きません。また急いで浄土へ参りたいという心も起こらないのはどうしたことでしょう。』との質問に答えて、『親鸞も以前はこのような疑問を持っていました。唯円も同じ心であったのですね。よくよく考えてみれば、天に踊り地におどる程に喜ぶべきことを、喜べないからこそ、愈々浄土に往き生まれることは確かに定まったと私は思っています。喜ぶべき心を抑えて喜ばないのは煩惱のしわざです。けれども阿弥陀仏は予てより、そこをご承知の上で、煩惱を沢山持った凡夫よと仰せられたのですから、阿弥陀仏の悲願はこのような私たちのためであると知らされて、愈々頼もしく思えるのです。』と答えています。正にこの唯円大徳の心に通じるものがあります。

一茶は真の念仏者、妙好人であったのです。

（了）